

圧倒的な勝利者 (1)

【聖書箇所】 8章 31～33節

はじめに

●ローマ書 8章の学びも終わりに近づきました。31節の「では、これらのことからどう言えるでしょう。」という言葉で始まる最後の段落において、神は私たちを圧倒的な勝利者としてくださること。私たちひとりひとりをキリストの勝利にあずかる者としてくださることが述べられています。

●この箇所で、特徴的なことばがあります。それは4回「だれが、・・・し得ようか」「・・・するのは誰か」というふう(31, 33, 34, 35節)、強い反語法を用いて、私たちの勝利の確信を述べているのです。口語訳では、「だれがわたしたちに敵し得ようか。」「だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。」「だれが、わたしたちを罪に定めるのか。」「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。」とたたみかけています。「だれも、何者をも、私たちに敵することはできない、訴えることもできない、罪に定めることも、キリストの愛から離れさせることもできない」という強い表現がこのところに記されているのです。私たちは、キリストを通して圧倒的な勝利者とされていることを今回と次回の二回にわたって考えてみたいと思います。

1. 信仰の勝利の宣言・・・「神は私たちの味方である」

●31節「では、これらのことからどう言えるでしょう。」・・・パウロはこれまで述べてきたキリストにある祝福について、これ以上言うことはないが、それらをまとめて表わすとしたら、次のように言えると述べました。それはつまり「**神が私たちの味方である**」ということです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」—これは神による勝利の宣言です。

●私たちの人生の中で、どういう味方を持っているかということが、ある意味でその人の生涯を決めると言っても過言ではありません。利害関係によって、長い間、信頼し続けて来た友人や部下、家族(親、子)、身近な者から裏切られて、ある時から自分の敵となってしまうことがあるのです。決して変わる事のない、信頼のおける生涯の味方、そうした存在が私たちにとって必要なのです。パウロは、キリスト者の味方は、この天地を造られ、私たちのためにご自身の御子イエシュアを遣わされた神、その神こそ私たちの味方であると言っているのです。

●私たちはかつてキリスト者となる前は、神から離れて、自分中心に、神に敵対して、わがままいっばいに歩んでおりました。しかし神は、私たちが神の敵となって歩んでいた時でさえ、神は敵である私たちを愛してくださり、その敵の救いのために、和解の御手を差し伸べてくださったのです。天の父は、御子イエシュアを通して「自分の敵を愛せよ」と口できれいごとを言わせたのではなく、事実、十字架にかかっ

て、神の敵であった私たちの罪を赦して下さったばかりか、私たちの生涯の味方となってくださったのです。「味方」という言葉は、神自ら私たちの側についてくださっているという意味です。それゆえ、私たちはどんな敵に対しても勝利者とされている保証があるのです。

●宗教改革者のマルチン・ルターは、ローマ・カトリックの優秀な修道僧でした。彼がローマ人への手紙の研究によって、それまでローマ・カトリックの教えてきたこととは異なる真理を再発見しました。救いは行いではなく、信仰によって得られるということを知ったルターは、当時のローマ・カトリック教会を敵に回してしまいました。教会はルターの主張を撤回するように再三要求しましたが、ルターは撤回しませんでした。やがて彼は宗教裁判にかけられますが、その席上で彼は「われ、ここに立つ」と言って、何者をも恐れることなく、信仰による救いの真理のために立ち上ったのでした。

●パウロも聖書で語っています(Ⅱコリント 13:8)。「私たちは、真理に逆らっては何もすることができず、真理のためなら、何でもできるのです。」と。イエシュアも「真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ 8:32)と言っています。「真理のためになら何でもできる。真理はあなたがたを自由にする」ということはすばらしいことです。なぜ、そのようなことが可能なのでしょう。それは、神が味方となって、真理に従い、真理に歩む者の側についてくださるからです。

●キリスト者として歩むということは、決して敵対する者がいないということではありません。私たちが真理のうちに歩むなら、必ず、敵対する者が立ちはだかるのです。この世のしきたり、この世の考え、風潮ばかりが対抗するものではありません。家族さえも敵対するのです。イエシュアは言われました。「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。・・・あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言います。むしろ、分裂です。今から、一家五人は三人が二人に、二人が三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。](ルカ 12:49～53)。

●真理のためとは言え、家族が敵対するということは心が痛みます。しかし私たちが神に信頼するなら、神が私たちの味方となってくださり、私たちに勝利をもたらしくださるのです。真理に従うとき、一時的に家族の中に分裂をもたらすかもしれませんが、神に信頼するなら、神が良いように導いてくださるかもしれません。そのことを信じようではありませんか。人を恐れて、真理に従わないならば、私たちは何もすることができなくなります。「人を恐れると罫にかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」(箴言 29:25)と聖書は警告しています。

●ところで、神が私たちの味方となってく下さるという程度はどれほどのものなのでしょう。32節を読んでみましょう。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜みせずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。」とあります。ここで注目したいことは、「**惜しみなく**」ということばです。私たちは、人に対しても、神に対しても、惜しむ

という気持ちがつきものです。しかし神が私たちを助ける時には、惜しむということがないのです。神には出し惜しみするということがありません。「惜しみなく」です。つまり、この「惜しみなく」とは「無制限の恵み」なのです。私たちは神から最も必要な最善の賜物として聖霊をいただいています。聖霊はすべての領域における「助け主」です。このお方が私たちに「惜しみない」助けを与えるのです。私たちの内なる人を強めるのです。聖霊の助けによって、私たちに敵対する者に対して、絶えず勝ち得て余りある人生、すべてが益とされる感謝の人生を送ることができるようにしてくださるのです。今回、私たちはひとりひとりが、「主は私の味方。私は恐れぬ。人は私に何ができよう…。主は、私を助けてくださる私の味方」(詩篇 118:6~7)であることを大胆に宣言して、主に信頼する者になりたいものです。

2. 私たちを脅かすものからの勝利・「訴える者に対して」

●さて、主が私の味方であるなら、だれも敵対することはできないのです。しかしそれでも、私どもを脅かす存在があるのです。パウロはその一つ一つを分析して行きます。キリスト者となったとしても、完全な人間になっているわけではありません。罪を犯すこともあれば、小さな石につまずくこともあるのです。弱い自分がいるのです。その弱い自分を訴える者がいるのです。「神に選ばれた人々を訴える(告発する)者はだれですか。」(33節)。

(1) 第一の訴え(告発)

●第一の訴えは、人からのものです。イエシュアを信じて洗礼を受けた後に、「あれでも本当にクリスチャン?」「クリスチャンのくせに、何、あの態度」と後ろ指をさされると、途端に、自分がキリスト者としてふさわしくないと感じてしまい、意気消沈してしまうのです。もう二度と自分はキリスト者であると人前では明かさないと決心してしまいます。隠れクリスチャンになってしまうのです。人から指差され、訴えられることに脅えて勝利者としての歩みができなくなってしまうのです。

(2) 第二の訴え

●第二の訴えは、自分自身からのものです。人からの訴えがなくても、自分が自分に訴えるのです。自分の良心に対してです。「キリスト者と言いながら、何という不甲斐ない、力のない、自分か」と。一つの罪にも誘惑にも勝つことのできないそんな自分が嫌でたまらない。疲れる。もう私なんかキリスト者としてやっていく資格などない」という自己告発です。自分はこのままではいけない。もうだめだと思い、自分で自分を断罪して、貶めてしまうのです。

(3) 第三の訴え

●第三の訴えは、サタンからのものです。「お前は偽善者だ。人前ではりっぱなことを言ったり、祈ったり

しているが、人の見ていないところでは汚れたことをし、思い、そして行っている。しかも陰で人の悪口を言っている。おまえのような者が神に愛される資格はない。」と。人からの訴え、自分自身の良心による告発、そしてサタンからの訴えがあることをパウロは知っていました。しかし、「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。」と断言しています。ああ、何とすばらしいことでしょうか。「神が義と認めてくださる」と言うのです。なぜなら、私たちが人から、自分が自分で、またサタンから訴えられるありとあらゆる訴えが、イエシュアの十字架の血潮によって、退けられているからです。なぜなら、それらの訴え、告発は、すべて十字架の上に置かれて、その罪の正しいさばきがすでになされてしまっているからです。私たちがなすべきことはそのことをただ信じることなのです。私たちの身代わりとなって裁かれたイエシュアを自分の救い主として信じるだけで、無罪放免の身とされたことを受け取るのです。ですから、だれも私たちに訴え、告発することはできません。なぜなら、告発すべき事実がすでにキリストにおいて解決済みとなっているからです。

●キリストの十字架の救いは完全なものです。どんな罪であったとしても、そのすべてがすでに神の前にさばかれているからです。私たちは罪人でしかありませんが、その罪が赦されています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 5章 8～11節

8・・・私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。

●「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあるように、神に愛され、愛され続けている存在なのです。たとえ、いまだ花咲き豊かな実を結ぶに至っていなくても、神の愛の対象であり、神に救われたかけがえのない神の子どもなのだということ。キリストの十字架を信じた私たち一人ひとりをご覧になって、神は満足しておられるのです。私たちが自分をどのように思おうが、一切関係ないのです。ただ主が満足しておられて、私たちが愛しておられることに目を留めれば良いのです。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8章 33節

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。

1995.3.26